咎人-TOGANIN-

優癒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
咎人－ＴＯＧＡＮＩＮ－

【Ｎコード】
Ｎ３９８１Ｐ

【作者名】
優癒

【あらすじ】
少年は、生まれた時から犯罪者だった――。
所在地不明・指名不明・出身地不明の世界的大犯罪者・『咎人』。
その『咎人』を生け捕りするよう政府から依頼を受けた『正義の殺し屋』クロウド。追うものと追われるものが出会い、両者の運命が、形を変えてゆく。　　若干シリアスな、だけどたまに笑いのあるファンタジー。

Prologue

すっかり凍えきった彼の白くきれいな手に、それとは対照的に生温かくどす黒い汚らしい血が、べったりとへばりつく。
身体に大きな穴をあけられ完全に息絶えた男を軽々と持ち上げ、後ろの方にある死体の山に放り投げる。ドサッ、という音がして、山がまた一つ大きくなった。
しばらく自分の血ぬられた手を見つめた後、彼はゆっくりと踵を返し、死体の山に登ると、その上でどっかりと腰を下ろした。先ほど息絶えたばかりの死体はまだ生温かく、冷えた彼の身体を温める。
呼吸を整えるようについた吐息は白く、それを見て彼は改めてそこの寒さを実感した。

「…寒い…。」

目を閉じると眠ってしまいそうだ。だけどここで寝たら、きっと死んでしまう。…いや、それでいいのかもしれない。そもそも自分はいったい何のために生きているのか、凍りついた彼の頭では考えることも億劫だ。
ためしに目を瞑ってみた。だんだん思考が停止してくる。生理的欲求が満たされて、何とも言えない快感。気持ちいい。
…しかし意識が完全に飛ぶ寸前、彼はゆっくりと目を開けた。

死ねない。
なぜかは分からないけど、死ねない。死にたくなかった。

その時、ガサガサと何かが動く音が聞こえて、彼は顔をあげた。
十数人の男が、自分が気を抜く瞬間を虎視眈々と狙っている。

「…。」

一つため息をついて、彼は立ち上がった。

生きる理由なんてない。
だけど、生きていたい。

だから今日も彼は一つ、『咎』を作るのだ。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

はじめましてな方、そうでない方、こんにちは。色々な連載を大量に抱えている癖に、またもや新しい連載を作ってしまった浮気者・優癒です。

今までのちょっと馬鹿らしい現実風味な小説とは一転して、シリアス風味のファンタジーに挑戦。色々失敗するし途中で挫折する可能性もありますが、どうかお付き合いください。

Introduce－殺し屋クロウドの苦悩－

「『咎人』？」
「そ。最近あっちこっちで噂になってる…って、まさか知らないの！？」
クロウドは首を横に振った。それを見て杉崎遥奈は、信じられない、といったように口をあんぐり開ける。
マンガの中のような反応をする彼女に、クロウドはムッ、と顔をしかめた。
「…なんだよ、なんか文句あんのかよ。」
「はぁ…なんて常識知らずな男。こんなのが幼馴染なんて信じられないわ。」
「俺もこんな不細工な顔作る女が仕事のパートナーだなんて信じたくもねーよ！」
ムカッとして吠えるように言い返すと、遥奈は呆れるように溜息をついた。
大量の書物（七割はクロウドの好きなマンガで占められているが）の中から、普通の文庫本三冊分くらいはあるファイルを取り出し、ドン、とテーブルの上に置く。
『世界的犯罪者名簿』。それを開いて、遥奈はとある書類を取り出した。
「これが、『咎人』よ。」
「…。…ふざけんな。」
遥奈に、というよりは、見せられた資料に対してクロウドは舌打ちをした。
名前の部分には、およそ普通の人につけられるとは思えない名前―『咎人－ＴＯＧＡＮＩＮ』と書かれている。住所不明。出身地不明。所有能力不明。身長不明、体重不明。空白だらけの調査項目にも腹が立ったが、何よりもその写真と年齢が彼を憤怒させる。

名前の横、四角で囲まれた中にはられた写真は、何の屈託もない寝顔を浮かべる赤ん坊だったのだ。年齢は、二歳と書かれている。
この資料が書かれたのは十年前。現在十二歳の少年が世界的大犯罪者と言うのも訳が分からないが、なぜ二歳のころからこの名簿に書かれているのだ。
「何の冗談だよ。」
「何の冗談でもないわ。私もよくわからないけど、彼は、生まれた時から政府に敵視されて、そのまま二年後に大犯罪者に認定されたみたいね。」
「生まれた時から政府に敵視されているんだったら、出生情報くらい書いてあんだろ。」
「この資料も、政府が書いたもの。知られたくない事情があるんでしょう。」
そういう遥奈の顔も、心なしか不機嫌そうだ。
しかし、仕事は仕事。しかたがない。
「とにもかくにも、今回のターゲットはこの子だから。探し出して、できればいけどり。できなければ、殺すようにってさ。」
「…。」
政府下に置かれる伝説的殺し屋・クロウドは、こぶしを握り締め、頷いた。

普段クロウドが生活していて、仕事の指令を受ける町外れの廃屋を抜け出し、（クロウドの足の速さで）あるいて１０分のところに、小さな小さな公衆トイレがある。そのトイレの後ろのマンホールに向かい、暗証番号を発すると、重たいマンホールがあく。その中にあるのが、クロウドの為に作られた、いわゆる『仕事部屋』だ。
「ケン、仕事だ。」
その中には膨大な資料と、武器、そして彼の仕事をサポートする能

力者たちが数名いる。適当に挨拶をすませるとクロウドはその中の一人――青島ケンに話しかけた。
青島ケンの能力は、『千里眼』。写真さえ見せれば、何がどこにあるのかが分かる。最近はもともと政府が所在地を記載するため使うことは無かったが、こういうときには至極便利だ。
久しぶりの仕事に、ケンは嬉しそうに、もともと細い目を更に細める。
「へぇ、久しぶりですねぃ。今回の相手は、大物ですかい？」
「ああ。『咎人』という奴だが…。」
クロウドがそう言った瞬間、今度は大きく眼を見開いた。
「…マジですかよ。そりゃまた、すごい…。」
「知っているのか？」
「あたりまえですぁ。というか、知らない奴の方がどうかしてますぜ？」
目の前に居る自分がまさにそうだったのだが。クロウドは一瞬、相変わらず変な敬語（？）を使うこの部下を殴ってやろうかと思った。
遥奈にコピーしてもらった資料を渡す。その写真を見て、ケンはまた目を細めた。
「…冗談きついですよ、クロウドさん。こんな子供、てか赤ん坊があの世界的大犯罪者なわけ無いじゃねェですか。」
「気持ちは分かるが冗談じゃない。その資料が古いというのはあるが、『咎人』は現在１２歳の子供らしい。」
「１２歳…。」
未だ唖然とした声で繰り返すケン。
どうやら『咎人』は、名前は知れていても、その実態はあまり知られていないらしい。まあ流したところで殆どの人間が信じないだろうが。
「行けるか？　十年前の写真だが…。」
「突然変異でもしていない限り、大丈夫ですけれども。写真で見れる細胞を辿ればいいですから…。」

「どれくらいかかる？」
「十分あれば。いいですかぃ？」
「ああ。頼む。」
ケンは一礼し、ゆっくりと目を閉じた。
ケンが能力を発動させている証拠だ。あまり周りで物音をたててい
たりすると集中できないそうだから、クロウドは物音をたてないよ
うにケンから離れる。
静かに待つこと、約五分。半分の時間で終わらせたケンは、肩の力
を抜き、机に突っ伏した。
「…ふー…」
「わかったか？」
「…ええ、わかりましたぜ。ちょっと待って下せぇ、いま頭の整理
をつけますから。」
『千里眼』を使うと、膨大な量の情報が頭に流れ込んでくる。それ
を整理するべく、ケンは手元にあったメモ用紙を取った。
愛用のペンでつらつらと、情報を書きなぐり整理していく。三分ほ
どたち、ケンはようやくペンを置いた。
「…整理がつきました。俺が今から言うこと、しっかり覚えておい
てください。」
ケンの敬語から、なまりのようなものが消えた。よっぽど真剣にも
のを話す時の癖だ。
「まず、『咎人』の現在の容姿。黒くて短い髪に、大きくて、若干
青の混ざった目。肌の色は真っ白。身体の大きさは年相応で、はた
から見ると本当に普通の少年です。」
「…居場所は？」
「露の国・シアン。その国の南東に位置するシズリ村より西へ数百
メートル行ったところにある雪山の頂上で、大量の死体の上に座っ
て仮眠をとっています。」
「わかった。ありがとう。」
「…いいぇ、構いませんよぅ」

また元の口調に戻った。が、その表情は、いまいち元のようなお気楽な顔に戻らない。
どうした？　と聞くと、ケンは珍しくしおらしい表情で、呟いた。
「あの少年がなんだかかわいそうでならねぇんです。」
「かわいそう？　なぜだ？」
ケンはしばらく黙りこんで、小さく首を横に振った。
「…俺自身も、よくぁわかりませんよ。世界に名を轟かす大犯罪者で、たくさんの死体の山の上で眠る人間を、なんでかわいそうなんて思うのか。…でも、なんかわかりませんけど、やっぱ悲しい。あんな化け物が、かわいそうで、悲しいんです。」
「…。」
ケンに言われた情景を、思い浮かべてみる。
白い白い雪の中を、たくさんの人間の死体が赤く染める。その上に１２歳の少年が座り、眠っている。
…ケンの事が理解できなかった。そんな光景、おぞましい以外の、何ものでもないのに。

政府が決める、犯罪者の危険度ランク。その最上位に値する？ＳＳ？をつけられているのは、現在、世界でただ一人――『咎人』だけだ。
Ａランクまでの犯罪者ならば防具なしで生捕にできるくらいの実力を持つクロウドも、流石に武器なし防具なしではきついので、数年ぶりに倉庫の扉を開き、中で待っている誇りにせき込んだ。
「…さて、どうするかな…。」
なんの資料もなしでは、武器を選ぶのも困難である。とりあえず防具は軽めな奴をえらび、切れ味のよい短剣を持つ。
数年前は、国一番の鍛冶屋が鍛えたとかいう刀を愛用していたが、時間がたった今それをうまく使いこなせるかどうかは自信が無い。

下手にいい武器を持つと、自分が傷つくのだ。
「銃…いや、長距離戦にはならないだろうなあ。銃剣とか…」
「…能力を、使えばいい。」
「ぅおわ！？」
大量の武器を眺めて悩んでいると、突然後ろからぼそぼそと声が聞こえた。
驚いて振り向くと、サポーターの一人――曇潤零（タンユンレイ）が立っていた。
「び…っくりしたぁ。久しぶりだな、潤零。」
「…。」
「しゃべれよ。相変わらずだな、お前も。」
一年に一度この仕事場に顔を出すか出さないか、というくらい不勤労な男・潤零。
男にしては少し長めな髪は、白と灰色を混ぜて2で割ったような絶妙な色合いをしていた。そんなはずはないのに、心なしか全身がそんな色をしているかのように見えるのは、彼のあり得ないような存在感の薄さだ。しゃべらなければ気付かれない。しかもこれが何の能力でもなく、生まれつきと言うあたりが恐ろしい。
ただでさえ無口な上に、この影の薄さと、やる気のなさ行動の少なさ。数年間一緒に仕事をやってきたクロウドも、いまいちこの男の事が分からない。
「珍しいな、お前が職場に来るなんて。なんかようか？」
「…仕事。」
「え、お前も来るのか？　今回の仕事…。」
潤零は頷いた。
クロウドは驚くと同時に、困惑した。実を言うとこの男と一緒に仕事したことは、一度もないのだ。というか、こいつが仕事をしているところを見たことが無い。この潤零と言う人間は本当に謎で、デスクワークや実戦は全くせず、ただクロウドが仕事で何か行き詰った時、たった一言的確なアドバイスをして帰って行くのだ。
だから、戦闘能力も能力も何も知らない。政府がそれでもこの仕事

場に置き続けると言うことは、実力があるか、何かしらの理由があるのだろうが…。
「それは…政府の指令か？」
「…（コクン）」
「…ふーん。」
色々と心配はあるが、政府の指示ならば問題無いだろう。
潤零と一緒に仕事をすることはとりあえず置いといて、クロウドは先ほどのアドバイスに、答えを返した。
「能力使うって、俺、確か政府に禁止令出されてんだけど。」
「…。」
「能力を使えって言うのも、政府の指示か？」
「…使わなかったら、死ぬぞ。『咎人』は、お前の天敵にあたいする」
「…え、ちょ、潤零それって」
「外で待っている。」
そう言って潤零は踵を返し、出て行った。
やはり、あの人はよくわからない。――クロウドはそう思った。

大鷲に姿を変える能力を持ち、クロウドの仕事で実質一番役に立っていると言えるサポーター・神崎ツバサに声をかけ、そとに出る。
そこで待っていた潤零を見て、彼女は眼を大きく見開いた。
「え…潤零さん、来るんですか？」
「…。」
「政府の指令らしい。だから今回は二人になるけど、大丈夫か？」
ツバサは小さく頷いた。まあ、潤零の軽すぎる体重が増えたところで、そこまで苦でもないだろう。
ツバサは、いつもより数倍大きい大鷲に化けると、翼を大きく広げた。クロウドと潤零が上に乗ったのを確認し、大鷲は空へと羽ばた

いた。

ミッション・スタート。

1st mission@1　墜落

露の国・シアンの南東に位置する、雪の積もった広大なる荒れ地。そこに住む獣を狩るために、ある猟師は今日も、熊ほどの大きさのある犬を二頭と、愛用の猟銃を持ち、大きな岩の陰に隠れて目標が現れるのを虎視眈々と待っていた。

しばらくすると、大きな獣が一頭あらわれた。銃を構えて狙いを定めて、バン、と撃つ。急所に弾が当たった獣は断末魔の叫びをあげ、ドタッ、と倒れた。腰にさした切れ味のよいナイフを持って獣の皮をはぎに行こうとしたが、丁度その時上空から鳥の鳴く大きな声が聞こえて、足をとめた。

（今日はいい日だ。獲物が二匹、立て続けに表れるんだからな。）

――昔、大熊に襲われてできた頬のひっかき傷を掻きながら嬉しそうに微笑んで、銃を構え、鳥を撃とうと上を見上げる。しかし上空に居たそれを見て、彼は瞠目した。

真っ白な空に飛んでいたのは、大きな大きな鷲だった。それならまだいいのだが、鷲の上にはどうやら人が乗っていて、そして鷲はその黄色く大きな足に緑色の旗を持っている。

その光景は、世間知らずな猟師も噂で聞いた事があった。実物を見れるとは、今日は別の意味でツイているのかもしれない。

（『正義の殺し屋』クロウドだ！　クロウドが、仕事に出かけているんだ！！）

あれを撃ってしまったらその瞬間、彼の属する国への攻撃とみなされる。よくて終身刑、最悪の場合戦争が起こりうる。吠えたてる犬どもを黙らせて、猟師は銃を白い雪の上に放り投げた。

一生に一度見れるか見れないかのその光景に見惚れている。先ほど仕留めた獣が他の獣に食われる心配など、彼の頭には無かった。

この国の軍隊が持つ最新の戦闘機並みの速さで空を行く大鷲は、すぐに猟師の視界から消えて行く。…と、その瞬間だった。
猟師から見て遥か右の遠くの方で発砲する音が聞こえたかと思うと、大鷲が何かに打たれたかのように、大きくよろめいたのだ。
次いで今度は彼の左側から、先ほどよりも重たい発砲音が聞こえ、彼の眼にははっきりと、大鷲の右翼が貫かれるのが映った。大鷲は悲鳴を上げて、白い大地に墜落して行った。

しばらく唖然としていた猟師だったが、犬が手をなめる感触で覚醒し、先ほど見た光景を思い出して震えあがった。
（と、とんでもないものを見ちまった！！）
濡れ衣を着せられたらたまらない。仕留めた獣も数万する猟銃も置いてきぼりにして、大慌てで家に帰って行った。

「ツバサ！　おい、大丈夫か！？」
能力が解除され、人間の姿に戻ったツバサに、クロウドが呼びかける。
人間に戻ったツバサは右肩と左肺のあたりに穴を開けて、大量の血を流しながら、荒い息で雪の上に倒れたままだ。
「クロ…ド…さん…」
「まってろ、いま救助隊を…って、くそ、ここ圏外かよ！？　ふざけんな！！」
いつも部下の前ではひょうひょうとした上司の顔をするクロウドだったが、今はそんな余裕が無かった。
潤零（ユンレイ）は無表情のまましばらくツバサを見つめた後、あたりを見渡す。
「…。」

その視界に入るのはどこまでも広い白い大地だけで、人の姿はいない。自分たちを撃ってきた奴らは、逃げたようだ。
「潤零！　ちょっとひとっ走りして、誰か呼んできてくれ。」
「…その必要は、ない。」
「へ？」
「…。」
滅多にない危機的状況に若干パニックを起こしている伝説的殺し屋をゆっくりと押しのけ、潤零はツバサの前でしゃがみこんだ。
防寒のためにつけていた手袋をはずし、背景と同化するのではないかと思うほど白い手をツバサの胸に開いた穴の上に置いた。数秒後、潤零がゆっくり手をどけると…傷が、完治していた。
「！」
クロウドが驚く。潤零はツバサの右肩にも同じように手を置き、数秒後には、やはり傷がふさがった。
「す…ごいな。ありがとう、潤零。」
「…これから、どうする。」
「念のため救護隊を配備する。潤零、ツバサを担いで歩けるか？」
「…。」
さっきとは違いやすらかな顔で眠るツバサを軽々と背負い上げ、潤零は歩き出した。

近くにあった山小屋のようなところに入り、ツバサを横に寝かせて上からコートをかけてやり、クロウドが持ってきたライターで薪に火をつけ、それを囲むようにして二人も座った。
「しかし、本当に有難う、潤零。あれは、お前の能力か？」
「…そうだ。いつか詳しく話す。…今はそれどころではない」
潤零の言葉に、クロウドの顔つきが真剣なものに変わった。
「俺らをうったのは、一体誰だ？」

「…。」
「わからない…よな。でも、一体何のために？」
「…。」
潤零は相変わらず無表情だ。わからないのだろうか。
いくら聞いても、答えてくれそうにない。そう判断して話題を変えようとした、が、その直前に潤零が呟いた。
「…『咎人』…」
「え？」
「…。」
再び黙り込んで、うつむく潤零。
「『咎人』って…」
「…お前は、彼の事を、どれくらい知っている？」
「は？」
潤零の質問に、クロウドは首をかしげた。
「資料に乗っていた程度…だけど。潤零は、何か知っているのか？」
「…『咎人』は、犯罪者ではない。」
「え…？」
「あれは絶大な力を持った、…『戦力』だ。」
「…戦力？」
潤零は頷いた。
それっきりクロウドがいくら質問を投げかけても、潤零が答えることは無かった。

山小屋を出て、念のため政府に救護依頼を出した後、二人は真っ直ぐ東へと向かって行った。
幸い三人が落ちたこの場所は、目標の雪山からそこまで遠くない。
二人の足で、何事もなければ今日中にはつくだろう。
走り出してから数時間、二人は無言だった。それぞれがそれぞれ考

え事をしていたのだ。しかしクロウドの発言で、沈黙は破られる。
「なあ、潤零…結局さっきの話、俺らを撃ったのは誰なんだ？」
「…誰なのか、という質問に対しては分からないと答えるしかない。ただおそらく、こちら側に対する敵意から撃ったわけではない。」
「…え？」
「我々の国を邪魔だと思っている政府や人物、組織は大量にいるだろう。だけど、それだけで殺し屋クロウドを撃とうとは思わない。…今まではこんなこと、なかったはず。」
「…ああ。一度もなかった。ターゲットに傷を負わされることは、最初の方はたびたびあったけど…。」
「そう。盾ついたところでそこまで意味が無いし、ある程度のリスクをおかすことになる。…だけど今回は、そこまでする価値がある。」
「『咎人』か…？」
「…。」
頷く潤零をみて、クロウドは更なる追及をしようと思ったが、やめた。『咎人』の事については、何故だか余りしゃべってくれないからだ。
それよりももう一つ、クロウドには気になることがあった。
「なあ潤零、お前、今回の依頼が始まってからやけに口数が多くないか？　いつも全然しゃべらないのに。」
「…。」
結局潤零はその後も何もしゃべらず、二人は雪山についたのだった。

1st mission@1　墜落（後書き）

クロウドと潤零の口調とキャラが定まらない…（汗）
潤零はあくまでも無口でミステリアスなキャラクターなんですが…
うまく表現できないです。

1st mission@2　堕落

――いったい、いつからだったのだろうか？

『生まれた！　おい、生まれたぞ！！』
生まれて初めて聞いた音は、生まれてきた自分を見て喜ぶ大人たちの歓喜の声。
『やったわ！！　これでこの国も…！』
『生体機関に問題は無いか？　早急に確認しろ！』
生まれて初めて見たものは、自分を取り囲むたくさんの機械。

そこまでは覚えている。
でも、それからを覚えていない。

『居たぞ！　殺せ！！！！』
気が付いたら、武器を持った人間達に追われていた。
何故なのかなんて、わかるわけもない。

最初は逃げているだけだった。
だって、戦い方を知らない。戦う理由もわからない。戦いたくない。
だから逃げた。逃げる足があったということは、もう五歳は過ぎていたんだろう。

森を、山を、草原を、荒れ地を。ただひたすらに逃げ回った。だか

ら今でも、足の速さには自信がある。
それでも、追ってくる敵を全てまききるなんて言うのは無理だったのだ。

『バカな…！』
生まれて初めて殺したのは、右肩に大きな銃を担いだ巨体の男。
どうやって殺したのかなんて覚えていない。

ああ、そうか。
多分その時から、自分は堕落していったのか。

＊＊＊＊＊＊

急に背筋が寒くなって、少年は目を覚まして死体の山から起き上がった。
いや、年中極寒のこの地では常に身体中が寒いのだが。しかし今現在感じている『寒さ』は、いつもとは違う――そう、悪寒と呼ばれるものだ。
だが、それは少年がはじめて経験するものだった。国一番の殺し屋と謳われる男に命を狙われたり、一般人に化け物と呼ばれるような獣に対峙した時でさえ感じなかったものだ。

神経を研ぎ澄まして気配を探るが、近くに生物の気配は感じられない。だけど彼の第六感が、嫌になるくらい警報をならしていて、近いうちに彼に危険が迫ることを教えていた。

死体の山から飛び降りて、いつ敵が来てもいいように体を温めること数十分。
はるか遠方から二人の男がやってきて、少年の視界にはっきりと映った。

一人の、長身で中々がたいのいい男が、少年を見て言った。

「お前が『咎人』…か？」

追われるものと、追うもの。
両者が対峙し――――運命の形が変わってゆく。

１ｓｔ　ｍｉｓｓｉｏｎ@２　堕落（後書き）

文章が短い。そして、終わらせ方が滅茶苦茶ですね…。うーん、文才がほしい。
でもやっとであってくれました…！！！　次の回は戦闘シーンになる、予定です。流血表現が出ると思いますので気をつけて…。

どうでもいいですけど、この話の題名『堕落』と前の話の題名『墜落』って漢字、すごく似てますよね。ちょっと感動…。

1st mission@3　戦闘

少年の反応は速かった。敵意ある視線を自分に向けるクロウドを目にした瞬間に、今まで殺した人間から奪ったのであろう丈夫な糸の付いた投げナイフを腰から引き抜き、猟銃よりもずっと速い速度でクロウドに投げつけた。
しかし、同じくらいクロウドも早かった。
「危ねっ…」
クロウドは身を軽くよじり、武器庫から持ってきた軽量で使いやすい剣でそれを後ろにはじいた。
その直後に、少年が糸を引っ張ったことにより背後から戻ってきたナイフは、潤零が短刀で糸を切ったことによりクロウドの一歩手前で落ち、雪に刺さった。
しかしそれに動揺することもなく、一連の動作をしているうちに少年はクロウドとの間合いを一気に詰めた。若干刃こぼれしている刀（これも、殺した人間から奪ったものだろう）を振り上げ、急所を的確に狙ってくる。
「っらあッッ！」
素早い動きでそれを避けて、クロウドは渾身の力で少年の腹を蹴った。
ろくに飯も食べていない１２歳の少年のガリガリの身体は、流石にそれには耐えきれず、１０ｍほど吹っ飛び、死体の山に突っ込んだ。クロウドが息をつく。が、それも束の間、
「！！」
自分の足元にあった、吹っ飛ばされる前に投げたらしい小型爆弾をクロウドは見つけた。
慌てて後ろに飛びのくが、
「っおあ」
いつの間に投げたのか、一番最初に投げてきたものとおなじような

ものが、後ろから飛んできて、クロウドの顔に傷をつけた。
少年は死体の山から起き上がり、二人を真っすぐと睨みつける。
「クロウド。…手を抜くな。」
「そんなつもりはなかったんだけどな…。てか、潤零お前、ちょっとくらいヘルプしろよ」
最初の投げナイフの糸を切って以来、ほぼ微動だにしなかった潤零にクロウドは文句を言った。
「しかし…強ェな、こいつ」
「出かける前にそう言ったはずだが。」
「敵の強さなんて戦ってみないと実感できないんだよ」
頬の血を拭い、クロウドも少年に視線を向ける。
「今さらだが、あんたが『咎人』だな？」
「…」
「俺は殺し屋のクロウド。政府にお前を捕まえるように指令を受けた。抵抗すれば殺せとも言われた。…大人しく投降する気はないか」
「…」
『咎人』は無言で、刀を構えた。
少しも考えるそぶりを見せず、迷わず戦うことを選んだ少年に、クロウドは少し顔を歪める。だが、すぐに覚悟を決め、同じく剣を構えた。
そして少年が動いたと同時に、今度は少年を殺すつもりで、彼と剣を交えた。

一体どれほどの時間がたったころだろうか。それまで呼吸をする暇もないほどに動き続けていた少年が、突然クロウドと間合いを取り、動きを止めた。
それに合わせてクロウドも動きを止める。
「…どうした？　ちょっと疲れて、「…お前は」…！」

少年は初めて、口を開いた。それにクロウドは驚いた。未だ声変りもしていない、少し高い声だ。しかし何より驚いたのは、少年の声には予想に反して、まだ『感情』が残っていた。てっきり潤零と同じような、何の感情もこもっていない、冷たいとも暖かいとも言えない声をしていると思っていた。
色の薄い少年の唇が、言葉を紡ぐ。
「…強い」
「…そりゃどーも」
「俺は…」
少年の目が、真っ直ぐクロウドをとらえる。
「…死ぬ」
「…いや、別に死ななくても…大人しくしたら、捕まえるだけにしとくから」
ぽつぽつと、単語だけをしゃべるターゲットに、クロウドは調子を狂わされる。こんなターゲットを相手にするのは初めてだ。
沈黙が流れる。もういっそ、この隙にひと思いに殺ってしまおうか。なんて事を考えていたら、少年がまた一つ、呟いた。
「俺は、死にたくない」
「…！」
そして、その瞬間に少年から発せられた、すさまじい殺気。クロウドはすぐに身構え、少年を見た。
少年の纏うオーラは、今までのそれとまったく違っていた。先ほどまでの敵意は完全に殺気へと変わり、驚くべきことに、それが具現化していた。
少年は、闇をまとっていたのだ。
「オーラが、具現化した…！？」
「…いや、違う」
先ほどまでだんまりだった潤零が口を開く。
「これが咎人の能力だ。…言っただろう、彼はお前の『天敵』だと」
「！…？闇？の能力…！！？」

潤零は頷いた。
少年の身体から出ている闇は、蠢き、白い世界を正反対に染めてゆく。闇に置かされた空気は、ピリピリと削れるような痛みを体に与えていた。…否、痛みだけではない！　じっさいに肌のいたるところから、血が出ている。
「なんつーでたらめな能力だよ、ったく…！」
「クロウド…」
「ああ、ああ、わかってるよ！」
潤零の催促するような目に、クロウドは力強く頷いた。
普段は政府に禁止されているが、今回ばかりは仕方が無い。
「“ライトニング”！！」
「…！」
あたりを覆っていた闇が取り払われた。景色はもとの、美しい銀世界に戻る。
「…ヒカリ…」
「そう、光だ。それが俺の能力。…正にお前の逆だな」
だから天敵。正面からぶつかっても、相殺するだけだ。
「…俺は、」
「死にたくないのか？　なら大人しく、眠りに着くんだな」
剣を構えて、少年を見据える。少年は殺気ごもった目でクロウドを見て、言った。
「お前を…殺す」

１ｓｔ　ｍｉｓｓｉｏｎ@３　戦闘（後書き）

驚くことなかれ、『咎人』９ヶ月ぶりの更新です。その割に文章ひどすぎる。
戦闘シーン書くの苦手だ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3981p/

咎人-TOGANIN-

2011年10月9日21時18分発行